

顔と声を伝える文学

— ナチスの障害者安楽死政策「T4 作戦」と ティノ・ヘマン『フーゴー』（2005） —

林 英 哉

はじめに

2016 年に発生した相模原障害者施設殺傷事件の後、ナチスが行った障害者の安楽死政策、通称 T4 作戦が日本で注目を集めた。¹ 生産性のない人間の面倒を見る必要はないという差別的な動機が双方に共通していることから、T4 作戦を通して再度障害者差別について考える試みがなされたのだ。² T4 作戦は回復の見込みがない重度障害者を「慈悲の死」の名のもとに殺害することを目的とした政策であり、その名称は本部が置かれたベルリンの Tiergartenstraße 4 に由来する。T4 作戦が開始された 1939 年から中止命令が出された 1941 年までに 70,273 人もの人々の命が奪われ、その後も非公式に殺害が続けられた結果、合計 20 万人以上が犠牲になったと言われている。³ 毒ガスによる大量殺害の方法は、ユダヤ人に対するホロコーストにも受け継がれた。

ドイツで T4 作戦が注目を集めるようになったのも、実は比較的最近のことだ。第二次世界大戦後のドイツでは、T4 作戦に加担した医師が再び社会で活躍し始める中で、T4 作戦を語ること自体がタブー視されたからである。彼らが引退したり鬼籍に入ったりした 1980 年代になってようやく、大部の研究書が出版されるようになった。⁴ それでも依然として T4 作戦は、ユダヤ人

¹ 多くの T4 作戦関連の書籍が再版・出版されたほか、NHK 教育テレビでは特集番組も再放送された。「優生思想と向き合う——戦時ドイツと現代の日本（1）」（2020 年 8 月 10 日放送）、「優生思想と向き合う——戦時ドイツと現代の日本（2）」（2020 年 8 月 11 日放送）。

² 植松死刑囚は次のように証言した。「どれだけの金と人手、物資が奪われているかを考え、泥水をすすり飲み死んでいく子どもを思えば、心失者の面倒を見ている場合ではありません。」神奈川新聞カナロコ『被告と接見 19 回、手紙 34 通——ゆがんだ正義と心の闇』2019 年 4 月 8 日掲載、URL: <https://www.kanaloco.jp/article/entry-159830.html>（2021 年 11 月 28 日閲覧）。「心失者」とは彼自身の造語で、意思疎通ができない重度の障害者のことを指している。事件後、事件や彼の動機に同調する声もインターネット上で多く発信された。これは、T4 作戦のような殺害政策が行われる土壌が現代日本にも存在することを示している。

³ Vgl. Vellguth, Klaus: *Aktion T4 – Mord mit System. Das NS-Euthanasieprogramm und die Geschichte eines Opfers*. Kevelaer 2014, S. 11.

⁴ Vgl. Klee, Ernst: „Euthanasie“ im NS-Staat. Die „Vernichtung lebensunwerten Lebens“. Vollständig überarbeitete Neuausgabe. Frankfurt am Main 2010 [Erstpublikation 1983].

に対するホロコーストの影に隠れ、一般の関心を呼ぶまでには至らなかった。⁵ 近年になってようやく、T4 作戦に加担した精神科医の団体が 2010 年に正式に謝罪を表明したり、犠牲者を追悼するモニュメントが 2014 年にベルリンに設置されたりした。⁶ 過去の負の出来事（ドイツでは特にナチスの犯罪）についての記憶と反省を後世につないでいく多面的試みを一般に「想起の文化」と呼ぶが、その対象に T4 作戦も含まれるようになった。日本で相模原事件と結びつけられて注目されたこともまた、T4 作戦をめぐる「想起の文化」の一側面だと言える。

そして文学の世界でも、T4 作戦を描いた作品が 21 世紀にいくつも出版された。例えば『アントン、または価値のない命の時代』⁷ (*Anton oder Die Zeit des unwerten Lebens*, 2004)、この論文で扱う『フーゴ——価値のない宝物、ある子ども時代の物語』⁸ (*Hugo. Der unwerte Schatz. Erzählung einer Kindheit*, 2005)、『八月の霧——エルンスト・ロッサの人生の物語』⁹ (*Nebel im August. Die Lebensgeschichte des Ernst Lossa*, 2008)、『専門家たちの時間』¹⁰ (*Die Stunde der Spezialisten*, 2017) などがあり、それらは文学賞を受賞したり映画化されたりもした。しかしながら、これらの文学作品はいまだ学術的議論の対象にはほとんどなっていない。¹¹

21 世紀に入り T4 作戦への関心が高まった結果、こうした文学作品が書かれる土壌が出来上がったのかもしれない。しかし逆に、文学作品を通して初めて、これまで注目されてこなかった歴史的事象を自分に身近な問題として捉えることができるようになり、そのことが T4 作戦に対する社会的関心を醸成したと言えるかもしれない。ナチスの安楽死政策の犠牲になった実在の少年エルンスト・ロッサを主人公にした小説『八月の霧』の作者ロベルト・ドメスは、次のように文学作品の意義を語っている。

アンネ・フランクは日記を書き、それが私たちに残されている。それに対して、エルンスト

⁵ いまでもその傾向が根強いことは、アライダ・アスマンが「想起の文化」を議論するときに常にホロコーストのことだけを念頭に置いていることにも表れている。Vgl. Assmann, Aleida: *Das neue Unbehagen an der Erinnerungskultur. Eine Intervention*. 3. erweiterte und aktualisierte Aufl. München 2020. 邦訳：アライダ・アスマン『想起の文化——忘却から対話へ』（安川晴基 訳）岩波書店 2019 年。

⁶ 藤井克徳『わたしで最後にして——ナチスの障害者虐殺と優生思想』合同出版 2018 年、62~66 頁参照。

⁷ Vgl. Zöller, Elisabeth: *Anton oder Die Zeit des unwerten Lebens*. 9. Aufl. Frankfurt am Main 2015. Gustav-Heinemann-Friedenspreis für Kinder- und Jugendbücher 2005 を受賞。

⁸ Vgl. Hemmann, Tino: *Hugo. Der unwerte Schatz. Erzählung einer Kindheit*. 5. überarbeitete Aufl. Leipzig 2018. 本論文における引用は括弧内にページ数で示す。

⁹ Vgl. Domes, Robert: *Nebel im August. Die Lebensgeschichte des Ernst Lossa*. München 2008. 映画が 2016 年に公開（監督 Kai Wessel）。

¹⁰ Vgl. Zoeke, Barbara: *Die Stunde der Spezialisten*. Berlin 2017. Brüder-Grimm-Preis 2017 der Stadt Hanau を受賞。

¹¹ 『アントン』を論じた研究には以下の拙稿がある。林英哉「児童文学で描かれた T4 作戦：ナチス・ドイツにおける障害者の安楽死政策と『アントン』（2004）」：阪神ドイツ文学会『ドイツ文学論攷』61 号（2019 年）、29~52 頁所収。

ト・ロッサはあらゆる書類、議事録、対話記録において外部から描かれている。 […] しかし彼が何を考え、何を感じ、どのように物事を見ていたのか、誰も興味を持たなかった。 / […] 私は伝記を書くために、ほぼ少年の視点から報告される小説形式をとることにした。そうしてのみ、知られていない安楽死の犠牲者に顔と声、思考と感情を与えることができたのだ。¹²

「T4 作戦という安楽死政策があった」という歴史的な情報や「死者 70,273 人」という数字からは、エルンストという個人を想像するのは困難だ。単なる数字のデータや歴史情報に、血の通った人間の「顔と声」を付け加えて伝えることで、人々の感情はより動かされることになる。犠牲者たちが何を考え、何を述べて、どのように行動したのかはその多くが記録には残っていない。また、生き残った者たちも重度の精神障害者がほとんどのため、詳しい証言は残っていない。それゆえ、歴史的な情報やデータに虚構性が加わることで初めて、個人の輪郭を浮かび上がらせることができるのだ。このフィクションの役割は、例えば映画など他のメディアにも可能ではあるが、本論文では特に文学に焦点を当て考察する。

そして、文学作品で描かれるのは被害者だけではない。加害者や傍観者も言葉を発し、行動する。したがって、被害者だけでなく加害者も含めてこそ、事柄の全体像を伝えていくことができるだろう。本論文が考察対象とする『フーゴー』は、被害者と加害者の両方の観点から論じることができる作品だ。この小説の主人公フーゴーは特異な精神障害を持ち、それを研究して名声を得ようとした医師が T4 作戦を利用して彼を殺害し、彼の脳を解剖しようとする。この作品の中では被害者であるフーゴーが物語の中心にいる一方で、家族や医者といった加害者や傍観者となった人々のそれぞれの事情にもスポットライトが当てられる。この作品を論じることで、個人の「顔と声」を伝えることについて多面的な考察が可能になるだろう。もっともその際には、被害者と加害者をフィクション化することの倫理的な慎重さもまた求められる。

本論文はまず、フーゴーの精神障害とその原因となった家族との関係性を見る。次に、フーゴーと彼の命を狙う医者との関係性に焦点を移す。その後、フィクションとしての『フーゴー』が持つ文学的側面に目を向ける。これらの分析を通じて、被害者ならびに加害者の「顔と声」が文学作品においてどのように描かれ、伝えられていくことができるかを考察する。そしてこの考察は、過去の負の出来事への取り組み一般を指す「想起の文化」に関わるものとして、ナチスの犯罪以外にも援用することができるだろう。そのため本論文の最後では、T4 作戦に結びつけられてきた相模原事件との関連も考察する。

¹² Domes, S. 322.

1. フーゴーの精神障害と家族の責任

ティノ・ヘマン (Tino Hemmann, 1967-) の小説『フーゴー』は、2005 年に出版された 400 頁弱の長編小説である。2018 年には第 5 版まで版を重ね、学校の授業課題にもよく取り上げられるなど、T4 作戦の社会的関心を高めることに少なからず貢献した本だと言える。¹³ それでも学術的な領域では、いまだまったく研究の対象にはなっていない。

主人公である 1931 年ライプツィヒ生まれの男の子フーゴーは、自己の中に別人格フリッツを内包する精神障害を抱えている。フリッツの人格とフーゴーの人格とが非常に明確に区別されているために、ライプツィヒ大学病院に勤務する精神科医フォン・ラッシュ教授の興味を惹く。彼は T4 作戦を利用してフーゴーを殺害し、彼の脳を解剖し、自らの業績と名声を高めようとしたのだ。フーゴーはその魔の手から逃れようとするが、最終的にドレスデン近郊のピルナ・ゾンネンシュタインにある精神障害者収容施設のガス室で殺害される。この施設は実在しており、そこでは T4 作戦下において 13,720 人が殺害されたという記録が残っている。¹⁴ フーゴーは虚構の存在だが、作品の多くの個所が歴史的事実に基づいている。

物語はまずプロローグから始まる。9 歳のフーゴーは担任教師のメンゲン先生に、生まれた時から今までのことを思い出してみるように言われる。メンゲン先生は素人ながらフーゴーのカウンセリングを試みているようだ。そこから彼が生まれたころへ視点に移り、本編が始まる。その後はドイツの政治情勢なども交えて、ほぼ時系列的に物語が語られていく。フーゴーは 1931 年 12 月 24 日にヘッセル家の長男として、健康優良児として生まれた。父親アドルフ、母オーダ、二人の姉ヘルミーネとマルガレートが彼の家族だった。当時ドイツの経済状況は世界恐慌のあおりを受けたどん底にあり、父親は失業していた。彼はそのストレスと元来の熱しやすい性格から、周りにあたり散らすようになっていた。生まれたばかりの赤子の世話はすべて母親任せで、「まるでこの男の子が彼には存在していないかのようであった」(18)。父のフーゴーに対する忌避感が特に異常だったのは、フーゴーの外見が他の家族と大きく異なっていることも関係していた。フーゴーは家族の中で唯一のブロンドの髪をしており、アドルフはオーダの不貞を疑ったのだ。

そしてこの忌避感が虐待へと発展する。フーゴーが生後八か月になったころ、母オーダが入院したため、父親はひとりで子どもたちの世話をしていた。彼はフーゴーが姉たちに誤って園

¹³ Gymnasium St. Augustin zu Grimma の 10 年生だった Hans Daniel Cleemann は学校の課題で『フーゴー』についてレポートを書き、T4 作戦に関する多くの情報を付して出版した。Vgl. Cleemann, Hans Daniel: *Facharbeit zu Tino Hemmanns Buch „HUGO. Der unwerte Schatz“. Eine Untersuchung einer dramatischen Erzählung frei nach Begebenheiten aus der Zeit des Nationalsozialismus*. Leipzig 2016. ギムナジウムの生徒のレポート課題が出版されることはまれであるが、これは『フーゴー』と同じ出版社から出ており、この小説を授業で扱う際の補助的教材としての役割や教材としてのこの小説を用いることの有効性を宣伝する目的もあったのではないと思われる。

¹⁴ Vgl. Gedenkstätte Pirna-Sonnenstein. URL: <https://www.stsg.de/cms/pirna/startseite> (letzter Abruf: 28.11.2021).

芸用の土を食べさせられ、胃を悪くしていたことを知らなかった。腹痛で泣き止まないフーゴーに対し、父親は初めての折檻をした。その後もフーゴーは、継続的に父親からの虐待を受ける。病院から帰ってきた母親と姉たちは、それを見て見ないふりをし続けた。暴力の矛先が自分たちに向くのを怖れたからだ。こうしてフーゴーは家族の中で孤立した存在になった。それゆえ彼は自分を助けてくれる存在を必要とし、そこで生まれたのが別人格のフリッツだった。

「パパは僕をぶつだろう」と不安げに僕はささやいた。「もしかしたら死んじゃうかも。」
／「じゃあ僕が行くよ。僕はぶたれてもかまわないから」とフリッツはささやいた。／「君が僕のかわりになってくれるの？」／「そうさ、フーゴー。だって君は僕の親友なんだから。」 (33)

フーゴーは、強いストレスを受けて自らの中に別の人格フリッツを生み出し、この人格に痛みを負わせることで自らの人格を守ろうとした。フリッツは、虐待を受けてフーゴーの精神が不安定になったときにとりわけ姿を見せる。フリッツは通常、いわば「想像上の友人 (imaginary friend)」としてフーゴーだけに姿が見え、声が聞こえる存在として現れるが、フーゴーを通して外側に表れる時もある。それゆえフーゴーは「人格の分裂 (Persönlichkeitsspaltung)」 (180) と診断される。フーゴーがフリッツと対話しているとき、あるいはフリッツが外に現れるとき、文章はイタリック体で書かれる。それによって、読者はフリッツが現れているときを視覚的に察することができるようになっている。

メンゲン先生に言われて過去を回想するフーゴーは、フリッツが初めて現れたときのことを次のように思い出す。父親から虐待を受けたある夜、フーゴーは小さなベッドの中で寝返りを打った。すると、誰かがそばに現れフーゴーの肩に触れた。「それは…それはフリッツだった！フリッツは僕をついに見つけてくれた。僕は長いこと彼の眠っている顔を見つめた。」 (21) ¹⁵ ベッドに寝ていたのはフーゴーだったはずだが、いつの間にか寝ているのがフリッツで、それをフーゴーが見ている構図に変わっている。この二つの人格の入れ替わりは、二人が同一の人物の中にある別人格であること、そしてフリッツがフーゴーの身代わりを引き受けることを端的に表現する。「フリッツ、君は何を経験したんだい？——今ではフリッツが痛みにあちこちのたうち回っている。」 (ebd.) ベッドの中で寝返りを打っていた (sich herumwälzen) フーゴーがフリッツのことを認識したとたんに、虐待の痛みにあちこち回る (sich wälzen) 役割がフリッツに移行する。この箇所は、類似した言葉を連ねることで二つの人格の間にある連続性を表

¹⁵ フーゴーは虐待を受ける前から「フィッツ…フィッツ」 (19) と誰かを呼ぶ癖があった。これがフリッツのことを指しており、「ようやく見つけてくれた」という言葉も勘案するなら、フリッツの存在はもともとフーゴーの中にあり、虐待によって顕在化したとも言えるだろう。

現している。フーゴーがぶたれるフリッツを外部から客観的に見ているような描写があることが示すように、フリッツはフーゴーと完全に切り離された視点として登場する。

フーゴーは静かな子どもで、周りからはフーゴーが想像上の友だちを作り出して独り言をつぶやいてばかりいるように見え、彼の心の発達に問題があることは明らかであった。特に父親とは一切会話をしようとしなかった。そのため父親は、フーゴーをより一層乱暴に扱った。失業していたところにナチスから仕事を世話してもらっていた父親は、「ハイル、ヒトラー」と挨拶するように子どもたちをしつけていた。姉たちはすんなりと彼に従ったが、フーゴーは頑なに言おうとしない。というのもフーゴーは、なぜ「こんにちは、パパ」の代わりに「ハイル、ヒトラー」と言わなければいけないのか、理解できなかったからだ。フーゴーの子どもらしい単純な疑問が、結果的に父親とナチスに従うことの拒絶となる。「お前は家族とこの国にとっての恥だ。お前は馬鹿野郎だし、これからもそのままだ。」(41) 精神障害を抱えているのはフーゴー自身の責任ではないにもかかわらず、それを「恥」だと言って父親は強く非難する。父親は母親にフーゴーを助けてはならないと脅した。「男の子は苦しまなきゃいけないんだ。そうでなきゃわからないんだから。」(34) フーゴーは家族から当然与えられるべき保護を得られなかったばかりか、逆に家族こそが彼を虐げ、彼の精神障害を引き起こしたのだった。

父親は確かにフーゴーの精神障害の原因を作った張本人であり、自らがその原因であることに思いも至らず、さらに虐待を加える理不尽な人間として描かれる。フーゴーも父親に対して愛情を示すことはほとんどない。しかし、父親が置かれた状況もまた厳しいものであった。フーゴーを虐待した父親は過酷な仕事のストレスに常にさらされていた。また、障害を持った子どもがいること自体が世間体として好ましくなかったのは明らかであり、加えて妻の不貞を疑う猜疑心も、彼の心の不安定とフーゴーへの憎しみに拍車をかけた。父アドルフは、フーゴーをいつくしみ育てることを困難にする状況に置かれていた。このように父親は冷酷な人間として現れると同時に、その境遇もまた想像できるように書かれている。

一方の母親にはフーゴーは愛情を示していたが、彼女も父と同様に、フーゴーのことを十分な愛情を持って育てていたとは言い難い。フーゴーは愛しい存在である反面、夫の怒りの原因として疎ましい存在でもあったように思われる。病院に検査に訪れる場面では、フーゴーに検査入院のことを告げることなく、母親は先に家に帰ってしまった(171)。入院が必要であるならば、母親の口からフーゴーに説明して、別れの挨拶をすることもできただろう。病院側が母親に会わせようとしなかった可能性もあるが、これはフーゴーが母親によってそれほど大切にされていなかったことを示唆するエピソードだと言える。しかし彼女もまた、父親の手前、フーゴーに愛情を示すことができなかったと考えることもできる。

こうして家族の中で孤立していたフーゴーにとって、フリッツは唯一心を許せる存在であり、最も身近な家族だった。しかし、フリッツはフーゴー以外の人間にとってはあってはならない

存在であり、抹消すべき対象であった。それが大人からの虐待によって生み出されたにもかかわらず、その存在を大人が有無を言わず否定することは、フーゴーにとってあまりに理不尽なことに映った。

「メンゲン先生が望むように。ママが望むように。——フリッツ、君は存在してはいけないんだ！」／「でもそれでも僕はここにいる！」フーゴーは腕を組んだ。「僕もここにいるんだ！」／フーゴーの目には大粒の涙が浮かんできた。「フリッツ、僕たちは一緒にいなくちゃいけないんだ。彼らは君を簡単には消せやしない…。」（168f.）

フーゴーがフリッツに「君は存在してはいけないんだ」と話しかけたとき、涙を浮かべて「でも僕はここにいる！」と答えるのは、フリッツではなくフーゴー自身である。フーゴーにとってフリッツは別の人間だが、語り手を含めた周りの人間にはフーゴーとフリッツは同一の「僕」でしかない。フーゴーと周囲の人間の間には、フリッツという存在に対する認識の大きな差があった。フーゴーにとって大切な存在であるフリッツを、有無を言わず抹消しようとする大人たちの理不尽さは、周囲の人間が患者あるいは障害者本人の気持ちや意向を無視して自分たちの都合を押し付ける理不尽さであり、根本的な差別意識の表れだと言える。このように家族は、フーゴーの精神障害の直接的な原因となり、精神障害を持つ彼を拒絶することで、冷酷な加害者として現れている。そして同時にその背景となった状況も描かれることで、個々人の「顔と声」も読み取ることができるようになっている。この二重性が家族の描写に特徴的である。

2. 加害者へのまなざし——精神科医の責任

ここで被害者に加えて加害者に注目することの意味を、ドイツの「想起の文化」をめぐる議論をもとに考えておきたい。「想起の文化」はまず、被害者の視点に立って記憶をつないでいくことを重視する。例えばホロコーストを想起する際には、被害者であるユダヤ人の視点に立ってそれが行われる。しかしこの行為には、ドイツ人がユダヤ人に虚構的に同一化することで加害者であることを隠蔽し、被害者きどりをしているという批判もなされる。¹⁶ しかし「想起の文化」の理論的基盤を作ったアライダ・アスマンによれば、「想起の文化」は被害者への虚構的な「同一化（Identifikation）」ではなく、「被害者に対する寄り添い（Opferorientierung）」と「共感（Empathie）」を意味する。¹⁷ 「ゆきすぎた同一化がアイデンティティの間の差異を消してしまうのに対して、共感自己と他者との区別を前提とする。」¹⁸

¹⁶ Vgl. Assmann, S. 61. 邦訳 62 頁参照。

¹⁷ Ebd., S. 66. 邦訳 67 頁。

¹⁸ Ebd., S. 65. 邦訳 66 頁。

自らを被害者と同一化しないことが必要なのは、加害者と自らを「歴史的に同一視する」¹⁹ こと、そして加害者の観点からも「現在と過去の結びつきを生み出す」²⁰ ことが求められるからだ。そうして初めて、被害者きどりではなく、加害者の責任を受け止めることができる。加害者を自らに引き受けるためには、加害者を絶対的な悪とは見なさないことが必要だ。なぜなら、ナチスの時代をひとまとめに断罪して加害者を悪魔化することで、現在と過去が断絶し距離が生まれ、過去との真摯な対決が妨げられてしまうからだ。²¹

しかし自らを加害者に引き付けすぎると、彼らの罪を軽視したり正当化したりする危険性がある。そうした陳腐化や正当化に陥ることなく、加害者との結びつきを意識するためには、彼らの置かれた状況とそこから生じた思考や行為について共感することなく、距離をとって議論や考察することが求められる。そしてそれに寄与するものの一つが文学である。文学は、被害者に「顔と声」を与えることで彼らへの共感と寄り添いを可能にすると同時に、加害者にも「顔と声」を与えることで彼らについてより深く考えることも可能にする。『フーゴー』では、両親の加害者としての冷酷さと彼らが置かれた境遇が同時に描かれることで、彼らに共感することからも、彼らを一面的に断罪することからも距離を取っている。

また、家族以外に加害者として現れるのは、フーゴーを診察したライプツィヒ大学病院の精神科医、フォン・ラッシュ教授だ。医師は病気を治療することをその存在意義とするが、フォン・ラッシュ教授はフーゴーの精神障害を治療するのではなく、研究しようとしていた。フーゴーは複数の人格を持つと同時に、「10,933」が素数であるかどうかを瞬時に計算できるほどの知能も持っていたからだ（167）。ここでの研究とは脳の解剖を意味しており、これは言うまでもなくフーゴーの死を前提としていた。こうした医師の職業倫理への背信行為が『フーゴー』の中心テーマになることはプロローグで早々に示される。

「誰が僕から命を取ろうっていうんだ？ それは僕の命じゃないか。」／「君の命だって？ 笑わせないでくれよ、フーゴー。君から命を奪ってもいいと考えるものはたくさんあるんだ。病気や人間自身、やくざ者や殺人犯、立法者や為政者、兵士、大砲の弾、爆弾、それどころか医者や教授だってそうだ。」／「医者だって？」と僕はいぶかしげに聞いた。／「彼らは自分たちの義務を果たしていると思っているんだ。」（9）

「誰が命なんて取ろうとするのか」と、フーゴーは子どもらしい無邪気な疑問を呈する。彼にとっては、自分の命を奪おうとする人がいることが信じられないのだ。一方でフリッツは冷

¹⁹ Ebd., S. 66. 邦訳 67 頁。

²⁰ Ebd., S. 92. 邦訳 96 頁。

²¹ Vgl. ebd. 邦訳同頁参照。

静にフーゴーに諭し、この物語のテーマが医者によるフーゴーの殺害であることが読者に示される。フリッツがプロローグで予言的な警告を述べることで、この物語がその予言の成就へと向かって進んでいくことを決定づける。

フォン・ラッシュ教授がフーゴーの脳を摘出して研究しようとしていたことは、歴史的事実に基づいている。T4 作戦のドキュメンタリー映画『T4 作戦——ナチスの安楽死計画』 (*Aktion T4 – Das Euthanasie-Programm der Nazis*, 2015) では、当時ベルリン近郊の障害者収容施設にいたユリウス・ハラーフォルデン医師が、殺害された患者の脳を摘出した事例が紹介されている。²² また、ミュンヘンにあるドイツ精神医学研究所 (現マックス・プランク精神医学研究所) に 1939 年から 1945 年までに納入された脳の標本やプレパラートの数は 1,634 人分に上り、それ以外に 1,000 人以上の診断書も存在している。²³ 脳を研究するためという殺害の動機は物語上の演出ではなく、医師が実際に実行していたという現実に基づくものだったと言える。

そして、そもそも T4 作戦が生まれた背景には、医師たちがその展開に加担してきた優生思想があった。²⁴ これは、遺伝学などから見て健康で優秀な人間を増やすことによって、社会と国家の安定と発展を実現しようとする思想だ。優生思想は多くの国の場合、障害や遺伝的疾患を持った人の不妊・断種手術までにとどまるが、ナチス・ドイツにおいては優生思想が障害者の組織的な殺害にまでエスカレートした。それには、当時のドイツにおける社会的・経済的状況が深く関係している。第一次世界大戦後、戦争賠償金やスペイン風邪の流行などでドイツ経済は疲弊し、一層の効率化や合理化が求められた。精神科医のアルフレート・ホッヘと法学者カール・ビンディングの著作『生きるに値しない生の根絶の解禁』 (*Die Freigabe der Vernichtung lebensunwerten Lebens*, 1920) ²⁵ が非生産的な人間の安楽死を議論したのも、こうした風潮の中においてであった。『フーゴー』の副題にある「価値のない (unwert)」という言葉も、この著作のタイトル「生きるに値しない (lebensunwert)」に由来する。そこでは医学的・法学的見地から、治癒不可能な人や苦痛に苛まれている人、役に立たないとされた人の安楽死の正当性が検討された。その後のヴァイマル期の経済的合理性を重視した傾向や世界恐慌後の大不況

²² Bernstein, Catherine (Regie): *Aktion T4 – Das Euthanasie-Programm der Nazis*. Fridolfing 2015.

²³ Vgl. *Zwischenbericht des Opferforschungsprojekts wurde dem Bayerischen Landtag übergeben*. Stand: 17.02. 2020. URL: <https://www.mpg.de/14472459/zwischenbericht-des-opferforschungsprojekts-wurde-dem-bayerischen-landtag-uebergeben> (letzter Abruf: 28.11.2021).

²⁴ ドイツにおける優生思想は、工業化・都市化に伴う社会的落伍者の増大といった社会問題や、遺伝学の発展、エルンスト・ヘッケルに代表される社会ダーウィニズム思想の淘汰論などが複雑に絡み合うことで展開された。シーラ・フェイト・ウェイス「ドイツにおける『民族衛生学』運動——1904~1945 年」：マーク・B・アダムズ 編『比較「優生学」史——独・仏・伯・露における「良き血筋を作る術」の展開』 (佐藤雅彦 訳) 現代書館 1998 年、24~149 頁所収、30~37 頁参照。

²⁵ Vgl. Hoche, Alfred / Binding, Karl: *Die Freigabe der Vernichtung lebensunwerten Lebens*. 2. Aufl. Leipzig 1922. 邦訳：森下直貴／佐野誠 編『「生きるに値しない命」とは誰のことか——ナチス安楽死思想の原典からの考察』中央公論社 2020 年。

もまた、弱者に投じるコストを削減しようとする傾向に拍車をかけた。²⁶ こうした流れが、1939年にヒトラーの名で医師に対して出された T4 作戦の開始命令へとつながったのだ。²⁷

T4 作戦における医師、とりわけ精神科医の責任問題は、21 世紀になってようやく公に取り上げられるようになった。すでに述べたように、ドイツ精神医学精神療法神経学会（DGPPN）の会長フランク・シュナイダーは、2010 年 11 月 26 日に初めて公的組織の立場から公式の謝罪を行った。²⁸ T4 作戦を実行したのはナチス親衛隊らであったが、それは医師たちの協力によって初めて可能になった。自らの患者に治癒不能の診断を下し、「慈悲の死」の名のもとに殺害することを許可したことの責任を、21 世紀になってようやく公式団体が認めたのだった。シュナイダーが行った演説は、未来に二度と同じ惨事を起こさないという医師たちの誓いでもあった。

T4 作戦は役に立たない人間を安楽死させて、彼らを生きながらえさせるためのコストを削減することを目的としていたが、フーゴーに関して言えば、彼の精神障害が特殊であり、脳を解剖する価値があるという点が殺害理由になったため、厳密に言えば T4 作戦の対象者として殺害されたわけではない。また、T4 作戦の対象に選ばれる子どもの基準には「学習能力（Bildungsfähigkeit）」が用いられたが、問題ないと見なされる基準に到達していない場合でも、すべての子どもが安楽死の対象になったわけではなかった。²⁹ そしてフーゴーは知的レベルとしてはまったく問題がなく、安楽死の対象にはまずなりえなかったと考えられる。しかしフーゴーの症例は、フォン・ラッシュ教授の興味をひいてしまった。彼が通常では安楽死の対象とはならないフーゴーの殺害に踏み切ることができたのは、T4 作戦の実施が精神科医の裁量に大きくゆだねられていたことを示している。そしてその分、医師の責任もまた大きいものとなる。

フォン・ラッシュ教授は研究と医学の発展のためと言ってフーゴーを殺害しようとするが、その裏にはやはり障害者に対する強い差別感情があった。

「ある意味、我々は強いられているのだ、価値のないやつらから離れることを。君もわかるだろう、ドイツ民族はずっと意味もなくお金をやつらのために使わなければならない。我々の施設でのやつらの療養や世話には予算がいるんだ、やつらが労働によって対価をもたらすことは決してないにもかかわらず。」（184）

²⁶ ウェイス「ドイツにおける『民族衛生学』運動」、85~90 頁参照。

²⁷ 命令は以下のものである。「アドルフ・ヒトラー。1939 年 9 月 1 日、ベルリン。全国指導者ボウラーとブランド医学博士に対し、治癒不可能な患者の容体を批判的に診断した場合の人間的な判断に従って、慈悲の死が認められるための権限を、決定権のある医師に拡大するよう、責任をもって任命する。」Klee, S. 114.

²⁸ Schneider, Frank: *Psychiatrie im Nationalsozialismus. Erinnerung und Verantwortung*. URL: <https://www.dgppn.de/schwerpunkte/psychiatrie-im-nationalsozialismus/rede-schneider.html> (letzter Abruf: 28.11.2021).

²⁹ Fuchs, Petra: Zur Selektion von Kindern und Jugendlichen nach dem Kriterium der „Bildungsfähigkeit“. In: Maike Rotzoll (u. a.) (Hrsg.): *Die nationalsozialistische „Euthanasie“ – Aktion T4 und ihre Opfer. Geschichte und ethische Konsequenzen für die Gegenwart*. Paderborn 2010, S. 287-296, hier S. 290ff.

フォン・ラッシュ教授は、自らの欲望のために他者を犠牲にすることを、経済的な合理性の観点から正当化する。この生産性を盾にした差別は相模原事件の犯行動機でもあり、安楽死を装った身勝手な殺害行為の背景にある障害者への根本的な差別感情を表している。

もっともフォン・ラッシュ教授はフーゴーをあからさまに殺害することはできないため、権力を用いて外堀から埋めていく。まずはフーゴーを病院で預かることを認めさせるために母親に仕事をあっせんして言うことを聞かせる。その時父親はすでに戦地へ出征していたため、母親が仕事に出る必要があったことを利用したのだ。フーゴー自身も「ママはしたくない。ママはしなくちゃいけないんだ」(233)と、圧力がかかっていたことを理解している。結局フーゴーは家族から見放され、孤独のままに病院に幽閉される。「フリッツ？ 僕の兄弟？ 僕を一人にしないでくれ、フリッツ！」(234)。フーゴーの精神状態が不安定になったときにフリッツは対話相手として現れるが、フリッツも常に一緒にいてくれるわけではないのだ。

そしてこの作品に奥行きを与えているのは、フーゴーの周りにいた医師が、フォン・ラッシュ教授のような、患者を私利私欲のために利用する人間ばかりではなかったことだ。フーゴーが就学前検診で来院したとき、初めて診察を担当したのはヴァルター教授だった。ヴァルター教授は初め、フォン・ラッシュ教授に従ってフーゴーを治療しようとした。しかしそれはフォン・ラッシュ教授の真意を知らなかったからだった。彼が真の狙いを知って以来、ヴァルター教授とフォン・ラッシュ教授との間の軋轢が表面化する。フーゴーとフリッツもフォン・ラッシュ教授とヴァルター教授の対立に気づいていた。しかしフォン・ラッシュ教授の方がヴァルター教授よりも院内での立場が上であるため、「フォン・ラッシュ教授はヴァルターを戦地に送りたがる、彼が望むことをヴァルターがしなければ」(187)と、フリッツはヴァルター教授の運命を予告する。医者の中の力関係が患者の命を左右するという理不尽さがここに表れる。

ライプツィヒ大学病院には、フーゴーと同じく精神障害を持った子どもたちが多く入院していた。その一人であるペーターは、フーゴーよりも重い知的障害を持っていた。フォン・ラッシュ教授はフーゴーと同じく脳を解剖して研究するために、ペーターに食事を与えず衰弱させ、殺害しようとしていた。つまりペーターは、フーゴーの未来を予感させる役割を担っている。³⁰

「つまり、フォン・ラッシュさんはペーターが死ぬことを望んでいるの？ なぜそれを望むの？」フーゴーの眼はすぐに濡れて輝いた。彼は椅子から立ち上がり、〔引用者注：ヴァルター〕教授の腕をつかんだ。「でもペーターはちゃんと話していたし、動いていた。彼は遊びたがってるんだ！」／教授は手をフーゴーの手に重ねた。「彼はペーターの脳が

³⁰ ピルナ・ゾンネンシュタインにある展示施設のパネルでは、実際に T4 作戦で殺害された子どもで、同じ名前を持つペーターが紹介されている。Vgl. Cleemann, S. 176f. 『フーゴー』の登場人物ペーターはこの少年に由来しているかもしれない。

欲しいんだ…。わかるかい？」／「ペーターの脳？」フーゴーは教授を訝しげに見つめた。

「彼はペーターの頭を開けようとしているの？」／「そうだ。彼〔引用者注：フォン・ラッシュ教授〕は脳を調べたいんだ。そのためにペーターを殺すんだ。そして我々はそれに対して何もできない。」（195）

ヴァルター教授がフォン・ラッシュ教授の犯罪を止めることができないのは、フォン・ラッシュ教授が院内でより権力のある医師であったことに加え、障害者の安楽死自体が国策として許可されているからだ。したがってヴァルター教授は、自らの医者としての矜持とその社会的立場の板挟みになる人間として描かれる。「自分はペーターに何もしてやれない。どっちにしろ手遅れなんだ」（206）と、ヴァルター教授は葛藤とあきらめを口にする。しかし、その無力感がフーゴーを救おうとする動機につながっていく。

ヴァルター教授には遺伝的な疾患を持った娘がいた。彼は、これ以上病気の子どもが生まれないようにと父親から妻の不妊手術をするように指示され、手術の結果妻は亡くなってしまった。それゆえヴァルター教授もまた、優生思想に人生を翻弄された一人だった。その後病気の娘も亡くなり、家族を二人とも失ったヴァルター教授は「フーゴーまでも失いたくない」（208）と、フーゴーを家族のように扱う。本当の父親から虐待を受けていたフーゴーにとっても、ヴァルター教授は父親も同然だった。彼らがここまで親密な仲になったのは、フーゴーが精神疾患の患者の中でコミュニケーションがきちんと取れる数少ない者のうちの一人だったからだと思われる。

ヴァルター教授はフーゴーを即刻退院させるように訴えた。しかしフォン・ラッシュ教授はそれを拒絶し、ヴァルター教授は病院から去ることになる。それでも彼は危険を冒してフーゴーを施設から連れ出す。一時的に知り合いの農家にかくまってもらうも、フーゴーが連れ出されたことにフォン・ラッシュ教授が気づいて搜索を始めたため、ヴァルター教授は再度農家から移そうとする。しかし農家の家族と仲良くなったフーゴーは、ずっとここにいたいと言う。そこでヴァルター教授は、フーゴーに次のように警告する。

「だめだ、フーゴー！ 君はこの人間〔引用者注：フォン・ラッシュ教授〕から身を隠すことはできない！ 君は彼の価値のない宝物なんだ、わかるかい、フーゴー？ 人間としては君は彼にとって何の価値もない。しかし君の脳は違う！ それは彼が探し求めている宝物なんだ！ 彼はそれを研究のために欲している、それについて本を書きたいと思っているんだ！ 彼は私に言っていた、君のような症例はこれまでになかった、これほどに分裂がはっきり表れているのはなかったと。フォン・ラッシュは、君の脳を使って有名になるチャンスだと考えているんだ。」（276）

『フーゴー』の副題である「価値のない宝物」の意味がここで明確に示される。フーゴーは、精神障害を患っているがゆえに「価値のない」人間だと見なされる一方、彼の脳は特殊な精神障害を示すがゆえに研究に値する「宝物」と見なされる。「宝物」である脳を手に入れるために、フォン・ラッシュ教授は権力を濫用してフーゴーの殺害に邪魔になるもの、邪魔になりそうなものをすべて懐柔し排除していくのだ。

医師たちがみなフォン・ラッシュ教授のように T4 作戦を支持し、それを私利私欲のために利用しようとしていたわけではなく、ヴァルター教授のように抵抗した医師も実際にいたかもしれない。³¹ しかし、ほとんどの医療関係者が命令に忠実に業務を遂行したからこそ、犠牲者が 20 万人以上に膨れ上がったと言える。彼らの心の内部には実際には葛藤があったのかもしれないが、それが記録として残されることはほとんどなかった。そうした記録には残りにえないものは創作を通じてのみ、疑似的な追体験が可能になるだろう。そしてそのフィクション性は、医師たちが実際に行った患者の脳の摘出と研究という歴史的事実に加えられたものだ。『フーゴー』は、T4 作戦に関与した現実の精神科医の責任を告発すると同時に、彼らの内部にあった葛藤や抵抗の可能性にも目を向けさせる。これが、『フーゴー』が T4 作戦の純粋なドキュメントではなく、文学作品として書かれたことの意味の一つだ。

3. 『フーゴー』の文学的側面

続いて取り上げるのは、『フーゴー』が文学作品だからこそ持っている要素についてだ。『フーゴー』の文学的な要素としてまず挙げられるのは、彼の精神障害によってもたらされる幻覚である。フーゴーにだけ見えるフリッツという幻覚は、とりわけ物語の筋を展開させる装置として重要な意味を持っている。というのは、それがフーゴー殺害の直接的原因であると同時に、フーゴーの運命を予言し、彼に警告する視点にもなるからだ。そして予言は、物語に悲劇性を与えるために用いられる古典的な文学的手法だ。³² ヴァルター教授はフーゴーをなんとか逃が

³¹ クレーはそのような抵抗の例をいくつか挙げている。Vgl. Klee, S. 220-227. しかしそうした抵抗の証言は、戦後に自分たちを正当化するために語られたという側面は否定できないだろう。また、T4 作戦に抵抗したことを理由に強制収容所送りになったケースも確認されていないという。Vgl. ebd., S. 223. 一方、障害者の殺害は多くの住民にとって公然の秘密となっており、批判もなされていたようだ。親衛隊の指揮官ハインリヒ・ヒムラーの 1940 年の書簡によれば、殺戮施設のあるグラフェネックの近隣住民が大量殺戮に気づき、「最悪の雰囲気 (die schlimmste Stimmung)」が生じていたとされている。Ebd., S. 235. また、聖職者による批判も行われた。特に知られているのは、ミュンスターのクレメンス・アウグスト・グラフ・フォン・ガレン司教が 1941 年 8 月 3 日に T4 作戦に対して行った批判的説教だ。Vgl. Vellguth, S. 133. この直後に T4 作戦は公には中止されるが、薬物等による殺害は密かに続いていくことになる。

³² 例えばソフォクレスの悲劇『オイディプス王』と『アンティゴネー』に登場する全知の予言者テイレスがその代表例だ。彼が予言した内容は悲劇の中で成就することになるが、実際には悲劇の筋の方が彼の予言に合わせて展開されていくと言ってよいだろう。

そうとしたが、結局自身は召集され戦地へと送られてしまうことになり、フーゴーもフォン・ラッシュ教授の手にかかり殺害されることになる。運命を避けるために努力するも、それがうまく行かずに予言が成就してしまうことによって悲劇性が生じることになる。

フーゴーの精神障害が予言という超自然的な力を示すことは、この作品に一種のファンタジー性を与えている。それは物語が進むにつれて、フーゴーが見る幻覚がフリッツ以外にも及ぶことによって増していく。フーゴーが農家にかくまわれていた時には、彼は夢の中で、戦地に赴いている農家の子どもたちの遺体を幻視する。彼らとフーゴーは全く面識がないにもかかわらず、フーゴーが夢に見た彼らの姿は翌朝に見せてもらった写真と一致していた。

そしてフーゴーの幻覚は、さらに物語の核心へと読者を導いていく。農家を離れた後、フーゴーは孤児院で牧師のモーリツに預けられる。彼は非常に厳しい人間で、来たばかりの子どもを「省察の間（[der] Raum der Besinnung）」（294）に一日閉じ込めることを伝統にしていた。それは、それまでの人生を反省させ神と対話させることを目的にしていると言うが、実際はただの虐待だった。密室に閉じ込められたフーゴーの精神状態は再び不安定になり、彼の前にフリッツが再び現れる。フーゴーの精神状態を悪化させるのは、結局大人なのだ。そしてフーゴーは暗闇の中でさらに別の幻覚を見る。それはフォン・ラッシュ教授が未来に書くであろう本だった。フーゴーはその本を読む。

私〔引用者注：フォン・ラッシュ教授〕は、9歳の男子の死の直後に彼の脳を細部にわたって調べることに成功した。ここに確言するのは、この脳はまったく異常を示しておらず、正反対に極めて優れたように形成されていたということだ。（297）

この後に続く文章も非常に緻密で、本当の学術研究のような文体と内容をしている。9歳の子どもであるフーゴー自身が案出した幻視としては不自然なほどに高度だ。これはフーゴーの知性を裏付けると同時に、幻視があたかもフーゴーが作り出した虚構ではないかのような真実らしさを与える。それによって、フーゴーの見たものは真実を語る予言的幻覚であり、彼がたどる運命が逃れ難いものであることが示唆される。

その時、暗闇の中に誰かの姿が現れる。フーゴーはそれを神だと考える。フーゴーと神との対話において、プロローグで行われた会話が再現される。

「それ〔引用者注：フーゴーの命を奪うこと〕をしてもいいと考えている人はたくさんいる。神様ではない、たとえそう言われていたとしても。命を奪うのは無数の病気だ。そして人間自身、兵士、大砲、爆弾、そしてそうしてもいいと考えている医者や教授たちだ。」
「医者たちも？」「彼らは自分たちが義務を果たしていると考えているんだ。」「それじ

「やあそれがいつ起こるのか誰にもわからないの?」「誰にも。本当に誰にもわからない。」
「僕が他人と違うから彼〔引用者注:フォン・ラッシュ教授〕は僕を殺すの?」(298)

この対話が作中でほぼ形を変えずに二回繰り返されるのは、医者が人を殺すという恐るべき事実が、この小説の最も核心にあるからだ。この対話は、プロローグではフーゴーとフリッツの間で行われる。しかしこの箇所ではフリッツから神へ対話相手を変更されており、神がやはりフーゴー自身によって作り出された存在であることが示唆される。しかしフーゴーが幻覚と対話していたのを聞いて、牧師のモーリッツはフーゴーが本当に神と対話していたと勘違いする。フーゴーの精神障害は、こうして神秘的で超自然的なものとして演出されることになる。

その後、子どもたちを虐待していた牧師モーリッツは施設から追放され、フーゴーは新しく来た牧師パウルに親切に扱われ、施設で平穏な時を過ごす。しかしフォン・ラッシュ教授がフーゴーの居場所を突き止めてしまう。これまではヴァルター教授が必死になってフーゴーを逃がしてくれたが、彼の力ではもはや及ばない。なぜなら彼は戦地へと召集されてしまうからだ。ある夜フーゴーはフリッツに起こされて、パウルに客が来ているのを見る。それはフォン・ラッシュ教授の命を受けてやってきた男だった。ベッドにもぐりこんだフーゴーは、白衣を着た男が子どもたちとリストを照合していく夢を見る。それは子どもたちをガス室で殺害する準備に違いなかった。この予知夢もまた、フーゴーの精神障害をファンタジー化する。

しかし、たとえフーゴーの精神障害のファンタジー化が物語的な魅力を生んだとしても、そうした精神障害のエンターテインメント化が倫理的に問題であると見なされる可能性は否定できないだろう。加えて、これが T4 作戦という現実にあった非人道的な犯罪の文脈で語られており、現実の犠牲者を過度にフィクション化しているのではないかという批判もなされうるだろう。文学によって個人に「顔と声」が与えられるとしても、それは結局虚構にすぎず、ある意味では過去を美化したり、逆に貶めたりするような偽りになる危険性を常に孕んでいる。

ナチスの犯罪を物語化することの危うさは、例えば、ホロコーストについて扱った映画の金字塔『ショアー』(Shoah, 1985)の監督クロード・ランズマンが行った、同じくホロコーストについての映画『シンドラーのリスト』(Schindler's List, 1993)に対しての批判が指摘している。

『ショアー』は、当時を生きた人々の証言を断片として寄せ集めることにとどめ、一つの意味を持った全体を形作ることを拒んでいる。一方『シンドラーのリスト』は、多くのユダヤ人を救ったドイツ人を描くことで、ドイツ人の罪を隠蔽し、かつ感動を狙うようなハリウッド的メロドラマにホロコーストを仕立て上げてしまっている。ランズマンによれば、ホロコーストはそもそも表現すること自体が不可能な圧倒的な出来事であり、その表現不可能性を意識してい

ないような「フィクションは一つの侵犯行為である」。³³

ランズマンは単に事実とは異なるものを描くことを批判しているのではなく、ホロコーストをフィクション化すること自体を完全に否定する。このラディカルさゆえに、ランズマンの主張は問題点も抱えている。それは、ホロコーストをできる限りありのままに提示しようとすることで、一般への伝播力が脆弱になるのではないかということだ。³⁴ 広く一般に伝わっていく力を通俗化や陳腐化として批判する姿勢は、記憶をただ保存するだけで、それを流通させるという役割を自ら放棄してしまっている。確かに、その流通したものが現実とあまりに解離していた場合、流通させること自体が逆効果になることもあるだろう。しかし重要であるのは、どちらか一つを追い求め、他方を退けるのではなく、それぞれが役割を分担し、一方を他方によって補完すると同時に、互いを批判しあっていくことではないだろうか。『フーゴー』はフィクションであり、『ショアー』よりも『シンドラーのリスト』に近い作品として、記憶を流通させる役割を担っていると言える。

また、『フーゴー』は、物語をファンタジー化するような演出ばかりを用いているわけではない。それが表れているのは『フーゴー』の結末である。1941年3月21日に、フーゴーを含めた孤児院にいる子どもたちは「遠足」という名目で「灰色のバス」に乗ってピルナ・ゾンネンシュタインの殺害施設に送られる(367)。³⁵ そのときフーゴーはもはや「無抵抗」(368)だった。牧師パウルも何もしないでナチス親衛隊に従う。孤児院にいた障害を持った子どもたちも一緒にガス室へと送られる。フーゴーはずっとフォン・ラッシュ教授に狙われ続けてきたが、フーゴーを殺害するために同時に他の子どもたちもまとめて犠牲になる。この物語の中ではフーゴーが中心に描かれ、他の子どもたちはあくまで脇役ではあるものの、彼らもまたフーゴーと同じく殺害される必要のなかった犠牲者だった。

フーゴーを含めた子どもたちはバスで運ばれたその日に一酸化炭素によって毒殺されることになる。そしてガス室で殺害されるとき様子がフーゴーの視点で生々しく描かれる。周りにいる子どもたちが窒息し次々と倒れていく中、「フーゴー！ 僕は君をどうしても失いたくない！」(372)とフリッツが叫ぶのが聞こえる。そのうちフーゴーも息ができなくなってくる。そして死を迎える場面は次のような終わり方になっている。

³³ クロード・ランズマン「ホロコースト、不可能な表象」(高橋哲哉 訳)：鶴飼哲／高橋哲哉 編『「ショアー」の衝撃』未来社 1995年、120~125頁所収、122頁。

³⁴ 山口一彦『S・スピルバーグ、「シンドラーのリスト」の光と影』近代文藝社 2016年、52頁参照。

³⁵ 犠牲者たちを安楽死施設へ運ぶ「灰色のバス」は、T4作戦の象徴的存在である。それはT4作戦のモニュメントのモチーフにもなり、2006年にラーフェンスブルクのヴァイスナウ精神病院に設置された。もう一つ別に同型のモニュメントも作られ、こちらはドイツ各地を周る移動式モニュメントになっている。Vgl. *Das mobile Denkmal: DAS DENKMAL DER GRAUEN BUSSE*. URL: <http://www.dasdenkmaldergrauenbusse.de> (letzter Abruf: 28.11.2021).

あらゆる痛みの中の痛み。	Der Schmerz aller Schmerzen.
燃え上がるような記憶。	Aufflammende Erinnerung.
花の海。	Ein Blumenmeer.
ママ、なんで？	Mama, warum?
フリッツ、助けて！	Fritz, hilf!
暗闇。	Dunkelheit.

(373)

フーゴーの死に向かって、文の長さが一行ごとに短くなっていく。それによって、ガス室の中で彼の意識が次第に遠のいていく様子が視覚的に表現される。フーゴーが今わの際で考えたのはフリッツのことだった。なぜならフリッツが彼にとって最も身近で、最も信頼できる存在だったからだ。いつもフーゴーの代わりに父親からの虐待を受けてくれたフリッツは、今回はフーゴーの身代わりにはなってくれなかった。フーゴーが死に直面したとき、いつもフーゴーのそばにいたはずのフリッツは消えてしまっていた。虐待は耐えることができたが、死という乗り越えることのできないものの前ではフリッツは無力だったのだ。

フーゴーの死後、家族のもとに彼の死亡通知書が届く。その通知書に書かれている内容がそのまま小説『フーゴー』の最後のページ（著者ヘマン自身が T4 作戦の解説をするエピローグは除く）となっている。その中で、フーゴーの死は肺炎によるものと偽られ、極めて事務的に伝えられる。直前に描かれたフーゴーの死に際の生々しい描写と、官僚的で冷徹な文書との対比は、ここで非常に際立っている。「治癒が見込めない苦痛を伴うご子息の容態にとっては、死はご子息にとって救済となったと見なされるべきでしょう。」（375）これを読んだ家族の反応は記されておらず、フーゴーの死をすんなり受け入れることができたのか、煮え切らない心のわだかまりが残ったのかは定かではない。誰の反応も書き入れないことで、書面への判断は読者にゆだねられる形になっている。

T4 作戦では多くの犠牲者が死を偽装され、事務的に処理されたように、これまで読者が接してきたフーゴーという人間の人生とその死も結局紙切れ一枚に押し込められてしまった。その書面だけを単に提示することによって、フーゴーの死を彼にとっての救いとして提示する医師と体制側の冷淡さと白々しさが効果的に表現されていると言えるだろう。この書面だけを提示する結末は、『フーゴー』が悲劇であることをあからさまに演出するのではなく、多くの被害者とその家族に実際に起こった事実をありのままに見せようとするものだ。それが逆に、そうした紙切れの背後に、フーゴーや医師たちのような各個人の人生があったということを想像させる。『フーゴー』は物語をファンタジー化するような演出と、こうした現実をありのままに提示するような演出とを組み合わせることで、個人の「顔と声」を描き出しているのだ。

結論——「価値のない宝物」、文学の可能性、そして相模原事件

ナチス・ドイツの時代には、障害を持った多くの人々が生きる価値のない生と見なされ殺害された。しかしフーゴーの場合は、彼が別人格のフリッツという幻覚を見る精神障害を抱えているために殺されたのではなく、彼の脳がフォン・ラッシュ教授の研究の材料として価値のあるものだったために命を奪われたのだった。副題の「価値のない宝物」という撞着語は、一見すると価値のないと見なされた人間も尊重されるべき宝物だという倫理的主張のようにも見て取れる。しかしここで「宝物」が意味するのは名誉や名声を得るための道具として利用する価値があるということであり、倫理性とは真逆の意味を持つ。「宝物」という言葉が本来持っているはずの肯定的な意味がここで揺さぶられている。しかしフーゴー自身にとって精神障害、つまりフリッツの存在は、フォン・ラッシュ教授にとってとは異なった意味で価値のある「宝物」だった。というのは、フリッツはフーゴーにとって唯一無二の大切な家族だったからだ。

「価値のない宝物」という副題は、障害それ自体が一面的に肯定も否定もできるような性格のものではないということ、つまり障害に対する評価のしがたさもまた暗示しているのだ。

『フーゴー』は主人公であるフーゴーの視点に密着して書かれていることで、T4 作戦の被害者に感情移入し共感するように描かれている。しかし同時に、加害者や傍観者となった周りの人々にも目を向けるようにも求めてくる。家族は日常生活のストレスや暴力への恐怖、経済上の理由からフーゴーに危害を加え、彼を見捨てた。フォン・ラッシュ教授は安楽死政策を盾に精神障害を持ったフーゴーの命を狙うが、彼の企みには多重人格者の脳を解剖することで医学の発展に寄与するという大義名分もあった。ヴァルター教授は確かにフーゴーの命を守ろうとしたが、その影には同じ境遇にあった別の子どもペーターの命を見捨てた罪があった。

もちろん加害者や傍観者それぞれの事情を描くことで、彼らの罪が覆い隠され、正当化されていないかには、常に批判的でなければならない。例えば、フーゴーを救おうとしたヴァルター教授という医師を登場させることは、T4 作戦に抵抗せず、逆に推進していた医師たちの罪を隠蔽してしまう可能性も否定できない。しかし、彼の試みが結局上手くいかなかったことが、その安易な美化を拒絶していると解釈することもできる。また、ヴァルター教授は医師として加害者側に立っていると同時に、妻を不妊手術で亡くした過去も持っていた。このように複雑な背景を持つ人物を登場させることで、加害者に対する完全な共感と拒絶を同時に回避しようとするのだ。

フーゴーの死の背景にあった、純粋な意味での「悪」とは言えないような事柄は、実際には記録に残りえないようなことであり、フィクションとしての文学だからこそ描き出せたことだ。したがって文学は、被害者と加害者の双方にフィクションとしての「顔と声」を与えることで、被害者に対する共感と寄り添いを可能にするだけでなく、加害者が置かれた状況とそこから生じた思考や行為の考察を通じて彼らに対する一面的な思い込みを避け、彼らの罪を自らの問題

として考えることに寄与する可能性を持つのだ。

そして文学がフィクションだからこそ持つ可能性は、ナチスの犯罪という個別の文脈だけにとどまらず、「想起の文化」一般に援用して考えることができるだろう。そこで最後に現代日本の文脈で考えてみたい。2016年の相模原事件の発生後、被害者の氏名を公表するべきかが問題になった。³⁶当初は本人や家族のプライバシーへの配慮などの観点から氏名の公表が見送られたが、後に家族の意思で氏名が公表された被害者もいた。これは障害者差別を危惧して被害者の情報を公開することをためらった家族がいた一方で、被害者が生きた証をどうしても残しておきたいと考えた家族がいたことを示している。³⁷後者の家族が拒んだのは、犠牲になった個人が隠蔽されて「死傷者 45 名」という単なる数字の中に還元されてしまうことだった。そうなれば、被害者への共感や寄り添いは時間が経過するにつれてますます困難になっていき、相模原事件が簡単に風化してしまうからだ。

こうした問題に対し、文学というフィクションは一つの可能性を提示することができるだろう。確かに文学は現実をありのまま正確に伝えるわけではなく、あくまでフィクションである。登場人物たちは実在の人物とは異なり、彼ら独自の道を歩んでいくため、描かれた「顔と声」と現実とを安易に同一視してはならない。³⁸しかしたとえ登場人物が実在の人物とは異なっていたとしても、読者は犠牲者個々人について虚構の登場人物を通じて考えることはできる。匿名によって消失してしまう個人性がフィクションによって補完されれば、たとえそれが虚構にすぎないとしても、後世の人間が実際に被害にあった人々に共感し寄り添うための助けにはなる。文学は虚構だからこそ、語られることができなかった「顔と声」、忘却されてゆく「顔と声」の存在を伝え、彼らについて考えることを可能にするのだ。

³⁶ 神奈川新聞の以下のウェブページには、同紙が掲載してきた相模原障害者施設殺傷事件における被害者の匿名報道についての記事がまとめられている。神奈川新聞カナロコ『匿名公判の源流』2020年1月18日掲載、URL: <https://www.kanaloco.jp/news/social/entry-232138.html> (2021年11月28日閲覧)。

³⁷ 神奈川新聞カナロコ『「美帆」さん 生きた証しを——母が手記と写真公開』2020年1月11日掲載、URL: <https://www.kanaloco.jp/news/social/entry-240449.html> (2021年11月28日閲覧)。

³⁸ Vgl. Ozick, Cynthia: The Rights of History and the Rights of Imagination. What happens when fiction is permitted to have its way with the actuality of the Nazi death camps? In: *Commentary* 107 (1999). URL: <https://www.commentarymagazine.com/articles/cynthia-ozick/the-rights-of-history-and-the-rights-of-imagination> (letzter Abruf: 28.11.2021).

Die überlieferten Gesichter und Stimmen
— Das Euthanasie-Programm in der NS-Zeit ‚Aktion T4‘ und
Tino Hemmanns *Hugo* (2005) —

HAYASHI Hideya

Das Euthanasie-Programm der Menschen mit Behinderung in der NS-Zeit, bekannt als ‚Aktion T4‘, wurde lange Zeit vom Holocaust an den Juden überschattet, steht aber seit Ende des 20. Jahrhunderts im Rampenlicht. Dabei ist es zum Gegenstand zahlreicher Romane geworden. In einem von ihnen *Der Nebel im August* schreibt der Autor Robert Domes, dass er in seinem Roman den vergessenen und unbeachteten Opfern ‚Gesichter und Stimmen‘ geben konnte.

Die vorliegende Abhandlung konzentriert sich auf Tino Hemmanns Roman *Hugo* (2005), um zu analysieren, wie Individuen in einem literarischen Werk tatsächlich „Gesicht und Stimme“ bekommen. Der Grund, warum in dieser Abhandlung *Hugo* aus den literarischen Werken, die sich mit der Aktion T4 befassen, ausgewählt wird, ist, dass die Geschichte aus der Sicht von Hugo, dem Opfer der Aktion T4, erzählt wird, was uns erlaubt, das Werk aus der Sicht des Opfers zu untersuchen, und dass auch die Darstellung der Täter, wie Familienangehörige und Ärzte, eine facettenreichere Betrachtung ermöglicht.

Der Titelheld des Romans *Hugo* leidet an einer psychischen Störung, bei der er eine andere Persönlichkeit namens Fritz hat, die sein sogenannter ‚imaginärer Freund‘ ist. Fritz wurde als Ersatz geschaffen, der Hugo vor dem Missbrauch durch seinen Vater schützt. Die Familie, die Hugo eigentlich beschützen sollte, hat ihn verletzt und wegen der alltäglichen Belastungen und der Angst vor Gewalt sowie aus finanziellen Gründen im Stich gelassen.

Wie in der ‚Erinnerungskultur‘ betont wird, braucht man eine Opferorientierung und eine Empathie mit den Opfern sowie einen Versuch, sich nicht von den Tätern zu distanzieren. Literarische Werke könnten es den Lesenden ermöglichen, sowohl die Opfer als auch die Täter zu verstehen, indem sie beide darstellen. Hugos Arzt Professor von Rasch benutzt das Euthanasie-Programm als Vorwand, um den psychisch kranken Hugo zu töten. Sein Plan ist es, Hugos Gehirn mit multiplen Persönlichkeiten zu sezieren, um zur Entwicklung der

Medizin beizutragen und Prestige zu gewinnen. Professor Walter hingegen versucht zwar, Hugos Leben zu retten, aber das kommt aus seinen Schuldgefühlen, weil er das Leben eines anderen Kindes, Peter, das sich in der gleichen Situation wie Hugo befand, im Stich ließ. Außerdem starb die Frau von Professor Walter durch Sterilisation (Unfruchtbarmachung). Er steht also gleichzeitig auf beiden Seiten, jener der Opfer und jener der Täter. Die Täter haben so jeweils ihre eigenen Hintergründe. Dass ein literarisches Werk sowohl den Opfern als auch den Tätern ‚Gesichter und Stimmen‘ gibt, ermöglicht den Lesenden nicht nur eine Opferorientierung und eine Empathie mit den Opfern, sondern auch die Ablehnung einer Dämonisierung der Täter.

Um die Rolle von *Hugo* als literarisches Werk zu erörtern, ist es außerdem notwendig, seine literarischen Merkmale zu untersuchen. Zunächst verleiht die Beschreibung der prophetischen Halluzinationen, die durch die psychische Störung des Protagonisten hervorgerufen werden, dem Werk einen mystischen und fantastischen Charakter. Die Prophezeiung ist ein klassisches literarisches Mittel, um eine tragische Geschichte darzustellen. Aber eine Fiktion könnte auch das Problem haben, dass sie die Undarstellbarkeit der Nazi-Verbrechen unterschätzen und die Tatsachen verzerren könnte, wie die Kritik von Lanzmann, dem Regisseur von *Shoah*, an *Schindler's Liste* zeigt. Wichtig wäre, dass Werke wie *Shoah*, die Gedächtnisse bewahren, und Werke wie *Schindler's Liste*, die sie verbreiten, jeweilig ihre eigene Rolle spielen. Und *Hugo* ist als Werk zu lesen, das zu den letzteren gehört.

Wenn man die Bedeutung des literarischen Werks im Kontext des heutigen Japan betrachtet, lässt sich die Debatte darüber anführen, ob die Namen der Opfer in die Öffentlichkeit gebracht werden sollen oder nicht, die nach dem Mordfall der Menschen mit Behinderung in Sagamihara 2016 aufkam. Auch wenn die Anonymität der Opfer notwendig ist, um die Privatsphäre von ihnen und ihrer Familie zu schützen, kann ein literarisches Werk dennoch die Möglichkeit haben, einzelne Opfer durch fiktive Figuren zu repräsentieren. Wenn die Fiktion die Anonymität des Individuums ergänzt, hilft sie künftigen Generationen, sich in die Opfer einzufühlen, auch wenn sie nur fiktiv sind. In dieser Hinsicht hat ein literarisches Werk, gerade weil es fiktiv ist, das Potenzial, ‚Gesichter und Stimmen‘ zu überliefern, die nicht erzählt werden konnten und in Vergessenheit geraten sind.